

動く言語と私

昔から「落ち着きがない」といろいろな人から言われてきた。とにかくじっとしてられない子どもだったようで、家族でショッピングモールに行けば、ちよつと目を離れた隙に、いつの間にかはるかかなたへと消えているらしい。こんな子どもを持った親は、さぞ大変だったことだろう(完全に他人事)。

だが、私の両親は偉かった。そんな私を「不動の子」に育てようとはしなかったのである。動き回るのは仕方がない。じゃあこの子が迷子になっても困らないように対策をしよう——私は徹底的に「両親の名前」「住所」「車のナンバー」を暗唱させられた。4歳のとき、私はいつも通りショッピングモールで迷子になった(もちろん記憶はない)。父はあちこちを探し回り、やっとのことで、館内をほつつき歩いている私を見つけた。

この子は迷子になったときに、いつもどうしているのだろうか？ 不思議に思った父は、少し後ろから観察することにしたらしい。自分たちの施した対策が

者は音(つまり声)を使って会話をするが、日本手話話者は体を動かしてコミュニケーションを行う。つまり、日本手話は「動く言語」ということである。

そんな日本手話と私が、あるとき出会った。大学3年生のときである。水曜5限が空いていたので、そこでたまたま開講されていた「日本手話I」という授業をとった。動くもの同士、相性が良かったのかもしれないが、それ以上にとにかく面白かったのである。

のめり込むように勉強をした。体を必死に動かして、日本手話の表現を片っ端から覚えていく。日本手話の勉強ができるし、なおかつ体も動かせるのだから、まさに一石二鳥である。

大学を卒業した今でも、日本手話の勉強は欠かさない。すきあらば、日本手話の動画を見て、シャドーイングをしている。というか、気付いたら日本手話研究者になっていたので、それが仕事であると言え。

そんな生活を送っていると、いろんなことが見え



発行：左右社

東京大学文学部助教 松田俊介

まつだ しゅんすけ



うまくいくかを確認できる絶好のチャンスでもある。

結論から言うと、あの「英才教育」はまったく役に立たなかった。私はインフォメーションセンターへてくてくと歩いて行き、受付の人に一言。

「すみません、お父さんが迷子になりました」

突然のでつちあげに父も焦ったらしい。急いでこのズル賢い息子のもとへと駆け寄る。すると、受付の人が父に向かって大真面目に一言。

「ダメですよ、お父さん。迷子になっちゃ」

ひどい話である。父は事情を説明して訂正するわけにもいかず、ただ頭を下げるしかなかったらしい。大人になった今、こんなふうに迷子になることはさすがになくなったが、それでもまだ落ち着きはない。でもそれでよかったと思っている。そのおかげで(?)、日本手話にこまでのめり込むことができたのだから。

日本手話は日本で話されている視覚言語で、身体動作を使ってメッセージを伝える。私たち日本語話

てくる。例えば、日本語の「ドアを開ける」という文。何の変哲もない、単純な文だが、これを日本手話に訳すときには、なんと無数のやり方がある。ドアを押して開けるのか、引いて開けるのか、あるいはスライドして開けるのかなど、開け方をいろいろ表現しないといけないのである。

それから、日本語の「開ける」はいろいろなものに使い回せる。「引き出しを開ける」「鍋のふたを開ける」「カーテンを開ける」「窓を開ける」などなど。それに対して、日本手話ではものに応じてまたいちいち表現を使い分けないといけない。その意味で、日本語は大雑把、日本手話は几帳面といえる。

とはいえ、日本手話はいつでも几帳面なわけではない。ときには大雑把な性格も見せる。例えば、日本語では「窓が開く」と「窓が開いている」という使い分けがあるが、この二つの文を日本手話に訳すと、なんとどちらも同じ表現になってしまう。日本語の感覚からすると、すごく不思議に感じられる。

こういうふうに、自分の母語である日本語と比較して、日本手話の面白い特徴を明らかにするというのが私の研究スタイルである。もしご興味がありましたら、最近一般書を書きましたので、ぜひお手に取ってください。前提知識がなくても読める本になっています。

日本手話のおかげで私の人生は豊かになった。毎日が楽しくて仕方がない。だから家族には感謝している。「不動の子」にしないという教育方針は間違っていないかった。私はこれからも「動き続ける人間」でいたい。

時の調べ Essay

略歴
1995年、高知県生まれ。専門は言語学(日本手話)。博士(文学)。手話通訳士。2026年3月に一般書『手の言語学』(左右社)を上梓。日本手話を知らない人にもわかりやすく伝えることを心がけて、日々エッセイや論文を執筆している。好きな言葉は「凡事徹底」